



水道事業連載 第一回

水道の将来を 考える

水道事業は地方公共団体が水道料金で経営する地方公営企業です。日ごろ、蛇口をひねると安全な飲料水が供給される水道事業の歴史や現状、課題について、今回から連載をスタートします。

今回は、市上下水道部・鈴木昌幸部長に話を聞きました。

三島市の水道事業の歴史

——まず最初に、市の水道事業はどのように始まったのでしょうか。

三島市の水道事業は、昭和23年に一番町給水場など旧陸軍軍用水道施設の無償貸し付けを受け、翌年に事業を開始しました。昭和32年の第1次拡張事業より平成7年の第5期拡張事業の39年間、供給区域を広げていきました。

——水の需要も増えていったんですね。

高度成長期の経済成長、東名高速道路の開通、新幹線三島駅の開設、宅地開発などによる人口増加

に伴い、需要は年々増えました。裾野市伊豆島田に浄水場を建設し、需要の増大に対応しました。

——需要の増大により、地下水枯渇などの心配が出てきませんかでしたか。

はい。熱海市、函南町と共に県に要望し、清水町の柿田川湧水から供給する駿豆水道事業が創設され、昭和50年から利用が開始されました。市内の小規模な給水施設を2つの水源による水道供給事業に統合し、現在に至っています。

——地区によってはほかにも独自の水源があると聞いたのですが。

佐野見晴台と山中新田地区には、それぞれ区域内に独自の水源を設け、市営簡易水道による水道水の供給を行っています。市営の水道事業以外にも、民間の経営による簡易水道や地域で運営している飲料水供給施設があります。

水道事業審議会を開催

——今後の水道事業経営はどうなっていくのでしょうか。

これまで整備してきた施設や水道管路が老朽化し、更新時期を迎えて

います。また平成8年から続く水需要の減少によって料金収入が落ち込み、現在は、給水経費（給水原価）が水道料金（供給単価）を上回り、市の水道事業経営を圧迫しています。

——厳しい経営状況なのですね。

はい。条例に基づき市議会議員、有識者、利用者で構成される、三島市水道事業審議会の第1回会議が7月13日、第2回が7月29日に開かれ、水道事業の経営状況や料金に関する審議が始まりました。

——それは気になりますね。とくに料金は身近なことですし。

審議会は原則公開で、ごなたでも傍聴できます。今回の開催は8月9日(火)です。会議の開催情報や会議録は順次、市のホームページや市役所の情報公開コーナーでご覧いただけます。



▲上下水道部・鈴木昌幸部長

幸原簡易水道を市の上水道に統合します



▲幸原簡易水道給水区域

し、大規模災害の発生などに対応していくため、簡易水道事業を廃止し、市の上水道への統合を希望する申し入れがありました。10月1日からは、市の伊豆島田浄水場からの上水道供給に切り替わります。

幸原町の飲料水は、大正15年から地域で経営する幸原簡易水道組合の独自水源から供給してきました。今後、安全安心な水道水を継続して供給



▲三島市水道事業審議会第1回会議の様子

次回は、水源や水道管路について、9月1日号に掲載します。

問合せ 水道課 (☎9833・2657)

英雄だって疲れる?! 一頼朝休憩伝説—

そこからさらに三島寄りの函南町間宮の広渡寺では、頼朝が大社参詣までの時間調整のために仮眠を取っていると、夢に阿弥陀仏の化身が現れ「汝の願望を叶える」とお告げがあったと伝えられています。

三島市域では、現在の東本町にある「間眠神社」に、頼朝がまだろんだ松があったと言われている。今は六代目の間眠の松と、腰かけたとも横になったともいわれる平たい大石（写真①）があります。

間眠神社からさらに大社寄りにある法華寺にも、本堂の前に頼朝が腰かけたと伝わる腰掛石（写真②）があります。この寺にはかつて、頼朝が衣を掛けた「衣掛けの松」もあつたそうです。

頼朝が流されたと伝わる現在の伊豆の国市から百日祈願に通つたとされる三嶋大社の間には、多くの頼朝伝説が残されています。その中には「頼朝が休んだ」というエピソードが数多くあります。頼朝が政子と結婚後に暮らしたと考えられている北条氏の館（現在の伊豆の国市寺家周辺）から下田街道を少し北上した原木に、餅売のおばあさんの茶店がありました。頼朝はいつもここで餅を所望していたと伝わっています。

いよいよ三嶋大社にも頼朝が腰を掛けたと言われる腰掛石があります。こちらは「政子の腰掛石」



▲写真①: ベッドのような大石 (間眠神社)

と呼ばれるものと、ふたつ並んでいます。

これらの頼朝伝説は、同時代の記録などに残っている話ではなく、地元の人々による長年の伝承であり、事実か否かを検証できるものではありません。しかしあちこちに残る頼朝伝説からは、武門の誉れ高い「英雄・源頼朝」はこの地で青年期を過ごし、後に成功するための雌伏の時を過ごしていたのだ、という人々の郷土への誇りのようなものが感じられます。それにしても、なぜこんなに休憩ばかりするのでしょうか？ 次回は、疲れるのも無理はないな...と思わせる頼朝の奮闘エピソードをご紹介します。お楽しみに！

企画展「源頼朝と伊豆」では、伊豆に残る頼朝に関する史跡や伝説の地をほかにも多数紹介しています。ぜひお越しください。



▲写真②背もたれのある腰掛石 (法華寺)



三島の村名⑦
沢地
(北上地区)
—龍澤寺—

沢地には、禅宗の高僧白隠禪師が開山した全国に知られる寺院「龍澤寺」があります。

龍澤寺は、江戸時代中期に沢地の山林に修行道場として開かれ、白隠禪師の弟子である東嶺和尚が中心となり雲水たちが修行に励みました。後に遂翁和尚、星定和尚、山本玄峰老師、中川宋淵老師など、多くの名僧を輩出しています。これら老師を慕い、見識を求めて、山岡鉄舟、伊豆の長八（鑲絵）、鈴木貫太郎元首相、池田勇人元首相など多くの識者や政財界人が沢地の野道を通いました。

この龍澤寺を長く支えてきたのが沢地の人々です。人手が要る整備作業や大きな行事には常に奉仕してきました。奉仕の礼などで頂いた老師たちの書、神仏の名号が農家の床の間に掛けられ、家の護りとなっています。信仰に守られた里、今も穏やかな沢地集落です。



▲龍澤寺